

### 3. 祭りの普及・啓発について 06.7

いま、どの地域でも昔から続いている祭りの存続が難しくなってきた。祭りを文化財として捉えまもっていくにはどうしたらいいのか、熱い議論が続いている。私は、祭りうんぬんの前に文化育成を日常生活のなかで文化に親しむべしと考える、ここに主張する。

文化の重要性は十分理解されているものの、日頃より営みの中で文化を認識することは極めてまれである。(文化は空気のようなものといったところか。) にもかかわらず、生活にゆとりや潤いや心身の豊さを求めていく際に、どうしても文化というものにすがりがちでもある。それゆえ、文化には即物的な要素が強くなり、かつ商業主義という現代風にアレンジさせられぎみとなってしまうがちである。特に祭りとなると、その傾向が顕著に現れ、祭りの担い手の気質が変わり、祭りの内容も本質は失われて形のみが残るといった懸念すらある。ではこうしたことをどう考えればいいのかであろうか。

もともと、祭りが地域コミュニティに立脚したものであるもので、祭りの衰退そのものは、コミュニティの衰退あるいは文化の先細りそのものといえる。そうした祭りを継続(存続)させるには、以下に示すように、問題を根源的なものと表層的なものとの二面に分ける。

第一に祭りの今日的な変質をとまっても残すもの。

第二に地域の問題として根源的に解決していくもの。

どちらが良くてどちらが良くないというつもりは無く、地域の状況諸事情に併せて、やれるところからやるといった方策がとられることでいいと考える。文化を如何に継承発展させていくのかが問われれば、それだけのボリュームを持つ価値観論争をやれればいいし、また、祭りを形だけでも残すことを選択するとなれば、それは文化の今日的環境の中での変質という捉え方で十分でもある。となると、何でも有りということになってしまうと思われるかもしれないが、そうではなく、どんな選択でも文化育成につながるからいいといたいのである。(そうした観点での論及があまりにも不十分だから、まずそこから始めたいという気持ちである。)

私は、問題設定を祭りの存続そのものの次元ではなく、(どんな様相になるにせよ)「文化育成の基礎は如何に」といった次元にしておけば十分と考える。このように考えれば、初等・中等教育に文化教育を倫理や道徳教育とともにリンクさせて、家庭で大人が子供に文化を大切にする日々の行動を地味に重ねていけば、いつしか文化の育成につながっていくことであろう。たとえ歴史性がなくても、たとえ文化性がなくても、何の変哲もない例えば食事であっても、身近なものに文化の香りを感じて生活を営み、そんな行為の連続が文化を形づくっていくことであろう。

そしてもうひとつ、多くの方を結集して文化談義に花を咲かせるだけでもいいと考える。文化施設や文化教室といったもの

ばかりではなく、地域の井戸端にそうした雰囲気の花を皆さんで知恵を出しながら咲かせたいものであり、津々浦々からの雰囲気造りを一人一人が心がけていきたいものである。